



TITLE:

資本主義と戦争 - レエニン帝國主義論の基礎的批判 -

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 資本主義と戦争 - レエニン帝國主義論の基礎的批判 -. 經濟論叢 1938, 46(1): 1-15

ISSUE DATE:

1938-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131050>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第 一 號 第 四 十 六 卷

昭和十三年一月一日發行

新年特別號

資本主義と戦争	文學博士 高田保馬
絶對國家	經濟學博士 作田莊一
農地自治管理論	經濟學博士 八木芳之助
ナチス主義と經濟的自己責任の原則	經濟學士 中川與之助
工場内住居施設に就いて	經濟學士 大塚一朗
シュモラーの國民經濟學方法論	經濟學士 白杉庄一郎
重農派租稅論の基礎問題	經濟學士 島 恭彦
國際收支均衡の理論	經濟學士 松 井 清
近代地代理論について	經濟學士 山岡亮一
投資乘數の理論	經濟學士 飯田藤次
國際收支策としての輸入統制	經濟學博士 谷口吉彦
共同體の人間學的考察	經濟學博士 石川興二
新着外國經濟雜誌主要論題	

（禁 轉 載）

經濟論叢

第四十六卷 第一號 (通卷第貳百七拾壹號) 昭和十三年一月發行

資本主義と戦争

——レニン帝國主義論の基礎的批判——

高 田 保 馬

一

資本主義が歴史の舞臺にあらはれてから、その種々なる方面に及ぼす影響が注目せられ、進みては其知識——マルクス學說——が歴史の上に決定的なる作用をすらも及ぼした。此影響は多方面に互るのであらうが、今の見地からこれを國內的なものと、國際的なもの即ち外部社會に對するものとに分つ。前者については一方資本主義没落に關する一聯の考察——人口過剩従つて貧乏の深刻になるといふ見解、商品過剩従つて恐慌の深刻になるといふ見解、資本主義組織崩壞の理論、國家死滅の理論等——が成立し、他方に於ては、觀念形態の變化の考察が成立する。こゝにはそれらを取扱ふのではない。後者については國際間、詳しくいへば資本主義國家相互間、資本主義國と後進國別して植民地半植民地との間の關係に關する見解が成立する、これらを一括して對外關係論とい

ふことにしよう。此對外關係論はむしろマルクス以後に於て著しき展開を示したる部分である。而して此展開の絶頂を示したるものとして、レエニンの帝國主義論をあぐることは何人にも異存のないことであらう。

けれども此レエニンの帝國主義論は、私見を卒直に述ぶるならば、一方に於て、マルクス自身の思想の延長に非ずして其逆である。他方に於て事實の真相をつかまず、徒に其皮相を見てゐるに過ぎぬ。たゞ自ら事實そのものをつかむ能力を有せず文字の表面を讀むに止まる場合、レエニンの實踐的業績に魅せられて人人はそれに眩惑せられる。私の考察は當然二段に分たれる。

一

マルクスにあつては、資本主義の發達が國際關係（立入つていふと民族國家間の關係）に及ぼす影響は、國內に於ける階級の對立の意義を高調する限り、二の方面から見られてゐると考へねばならぬであらう。一方に於て資本家的立場の上に、又はそれを含む民族全體の上に如何なる影響を及ぼすであらうか。茲には『共產黨宣言』から注目すべき文句をとり上げる。

『既にブルジョアジイの發達そのもの、自由交換、市場の普遍化、工業的生産とそれの伴ふ生活條件との一樣化は漸次民族間に於ける境界と對立とを弱めてきた。無産者の覇權はそれを一層完全に弱めるであらう。』

これは次の如くに解釋せらるることを必要とする。資本主義の發達につれ交通が密接となつて、各民族が益々一の市場を形づくるやうになり、又各民族の特殊相が弱まるから、民族間の對立が消滅してゆく。要するに、マルクス・エンゲルス自身の思想の中に、資本主義の發達につれ民族國家間の對立が愈々深刻さを加へて行くといふ見解が支配してゐた、とは考へられぬ。事實は正にその反對である。社會民主主義者にあつては、階級争闘の

必然性はむしろ民族を分裂せしめる、甲民族の無産者は乙民族の無産者と手をとるといふ見解が廣く行はれてゐた。例へばオットオ・パウアの如きもいつてゐる。『階級争闘の必然性はすべての民族を分裂せしめる。即ち労働者階級と資本家階級との經濟的利害關係は各民族の内部に於て相對立し合つてゐる。之に反して、何れの民族の労働者の利害も、すべて他の諸民族の労働者の利害關係と一致してゐる。』かゝる見方に従へば、各民族の資本家は資本家同志で利害相一致してゐるといふ見方も成り立つ。ジンメルジンメルの如きは、此點を最も高調したる一人である。マルクス自身の見解の中にかゝる立場を見出すことは、少くも私の寡聞を以ていふことを許さるるならば、困難であらう。けれどもマルクス自身、資本主義の發達につれて、資本家相互の對立、又はこれを含む各民族相互の對立が愈々深刻となるといふ主張を敢てしてゐるならば、マルクス學說の正統を以て任じてゐた社會民主主義の中にかういふ見方の支配し得る餘地はないはずである。

資本主義に於ける労働者の立場については、たゞ二の短き文句を引用しよう。共產黨宣言の末尾、第七十八節に於て現在の社會的政治的狀態に對する各國無産者の共同なる革命的抵抗の必要を述べ、最後に次の文句を以て結んでゐる。『すべての國に於ける無産者よ、團結せよ。』歴史の必然の線に沿うて奮闘するマルクスにとつては此團結はまた、資本主義經濟から生れたる必然であつた。次に同書の第四十九節のはじめにいふ。『人は共產主義者が祖國、民族を廢止するものなりとせめる。労働者は祖國を有せぬ。人は彼等のもたざるものを奪ふことは出来ぬ。』これは今日の資本主義國家に於ける労働者の態度を示せるものと見得るであらう。歐洲大戰當時カウツキイをはじめ、獨逸の社會民主主義者が労働者階級の反民族主義を信じ、それが大戰を妨げるであらうことをも

信じたのは必ずしも、マルクスの立場に背くものとはいひがたからう。『それ故に民族的軋轢はプロレタリアの中に於ては何等の地位を占むるやうのことはない。プロレタリアが精神的及び政治的に自立してゐる國では、其軋轢は彼等に何のかゝりもない。プロレタリアがそれほどの地位に進んで來てゐる場合には彼等は決して侵略的愛國主義を發展せしめないであらう。彼等は斷じて他國を犠牲にしてまでもその祖國を、その民族を益せんとはしないであらう。』²⁾

けれども、勞働者は祖國を有せずといふ文句の意義については異論がある。その代表的なるものはクウノオの見解である。さきの引用につゞくマルクスの文句は次の如くである。『プロレタリアはまづ第一に、政治的支配をもぎとつて、民族的階級に高まり自らを民族として構成せねばならぬのであるか、その意味に於てプロレタリアアトは一の民族に屬する。尤もそれは決して、ブルジョアジイの意味に於てさうであるのではないが。』クウノオはこれを註釋して次の如くにいふ。『今日では（一八四八年）勞働者は祖國をもたない。といふのは、勞働者は民族の生活にこれといふ程の分前をもつて居らず、民族の物質的及び精神的の財から、なほ全然除外されてゐるからである。併しながら勞働者階級は早晚政治的權力を握り國家及び民族内に於て支配的地位を占めるであらう。而して彼等はある程度に於て自らを民族として構成するであらうが、その時こそ彼等は民族的な存在をするやうになり、又民族感情をもつやうになるであらう。』『現在勞働者は祖國をもたない、何となれば彼等は民族生活に對し、とりたてて云ふべきほど其生活に参加してゐないからである。しかし彼は等、後にはそれに参加するであらうし、又自ら民族的發展の支持者とすらなるであらうが、その時には彼等は祖國をもつことになる。』

2) 同書 49頁による。

此クウノオの註釋には異議がある。第一に、勞働者が文化生活の享受に参加し得るに至ると祖國をもつやうになる、といふのがマルクスの意見であるか。少くも此文句の註釋としては、勞働者は鎖の中にあつて自主性をもたぬ。彼等が政權を握るときこそ、自主的な階級となり自ら民族となりうるときである。民族は自主的なものである。かう見るべきではないか。第二に、勞働者が政權を握るとしてもそれによつて、民族全體の民族感情が愈々高まるといふことを、決してマルクスが考へたわけではない。換言すれば、勞働者は祖國を有せず、といふ一句につゞくこれらの文句は別に何等の強い意味をも、制限をも有するものとは考へられぬ。勞働者が民族に高まつても、それはブルジョアジイの民族とはちがふ。ブルジョアジイの發達すらも民族の對立と其境界を弱めるのであるから、それらを一層弱めるといふ以上、勞働者の政治的支配が民族對立を存続せしむるはずもなければ、それを強化するといふ理由もないはずである。否それによつて萬國の勞働は團結するであらう。それと共にいはゞ『一民族内部に於ける階級對立の消滅と共に、諸民族間に於ける敵對關係も亦なくなるであらう。』さうであつてみると勞働者即ち無產者が民族にまで高まるといふことは、資本主義の發達につれて進行しゆく民族對立の緩和の傾向に對し、何等注目し値する意義を、少くもマルクスに於て、もつてゐなかつたはずである。若しわれらがマルクス學說そのものを離れて此點を考察しようとするときには、クウノオの註釋はむしろ事實に背くこととすらもある。社會に於て高級の文化を享受するものは、そのことのゆゑに、著しく國際的である。近代歐洲の歴史に於ても、國際的な親和交驩と、宮廷文化又は貴族文化とは切りはなしがたき關係に立つてゐる。文化の乏しい民衆ほど、土着の風俗、慣習、傳統を離れにくい(シユモラア、テンニイス、ジンメル等)。此意味に於

て、労働者が政治的權力をにぎり文化的享受に愈々よく参加することによつて、民族的性格が顯著となるとは考へにくい。況んやそれによつて民族間の對立が益々深刻になるとは、なほさら論斷しにくからう。

三

然るにマルクスの對外關係に關する此見解は、其後のマルクス主義によつて支持せられなかつた。而して自らマルクス主義の正統を以て任ずる人人によつて、これとは全く異なる意見が抱かれてゐる。それはマルクス以後に於ける事實の推移によつて動かされ、それを説明するための必要に出でたのであらう。

私はこゝにレエニンの帝國主義論を取上げて考へよう。勿論それには數多の先驅者がある。別して、マルクス主義者に數へがたいホブソンの帝國主義論（一九〇二年）は最も注意せらるべきものである。ヒルファディングの金融資本論（一九一〇年）は其内容に於て『最も價值多く理論的なる』研究と見られてゐる。そのほか、オオストリアのマルクス學者の若干、ロオザ・ルクセンブルクなどの研究にも同様なる思想をあとづけてゆく事が出来るであらう。レエニンの帝國主義論に於て、われらは別に獨創的なものを見るのではないが、たゞ其表現の強さを見る。この強さと彼に對する人間的評價とが其帝國主義論を重からしめたのであらう。

さて、レエニンを中心とする帝國主義論については、すでに説明を必要とせぬであらう。たゞ私は次のことだけを摘記する。『植民政策及び帝國主義は資本主義の段階以前に於ても、いな資本主義そのもの以前に於ても存在した。奴隸制度を基礎としたロオマは、植民政策を實行し且つある帝國主義を實現した。しかし社會的、經濟的構造上の根本的差別を無視し又は輕視せる、帝國主義に關するすべての一般的なる考察は、不可避的にたとへ

ば大ロオマと大英帝國との比較の如き、空虚な駁辯又は虚言に墮する。資本主義の初期の段階に於ける資本主義的植民政策でさへも、金融資本の植民政策とは本質的に相違してゐる。最新の資本主義の根本的特徴は、大企業家たちの獨占的團體が支配してゐるといふことである。この種の獨占は一切の原料泉源を一手に握る場合に最も鞏固である。國際的資本家諸團體が敵手との『鐵鏽山又は油田等を購入するためのあらゆる競争』に於て、『獨占の成效を保證するものはたゞ植民地の領有あるのみである。』『資本主義が發達すればするほど、原料の缺乏が甚しくなればなるほど、全世界に於ける競争及び原料泉源追求が尖鋭化すればするほど、それだけ植民地獲得競争が死物狂になる。』³⁾『帝國主義は資本主義の獨占的段階である。』⁴⁾『一方では金融資本は、少數の獨占的大銀行に集中し、且つ獨占的企業家團體の資本と融合せる銀行資本であり、また他方世界の分割は、どの資本主義國によつても占領せられてゐない地域を犠牲として障碍なしに擴大され得た植民政策から、既に残りなく分割されてゐる地球の獨占的支配といふ植民政策への過渡である。』⁴⁾

なほレエニンの立場からは、此帝國主義は現存の資源の獲得を求むるのみならず來るべき技術の變革によつて新しく資源となりうるものの獲得にまで進むこと、過去に於ける實力によつて、行はれたる植民地半植民地の分配が、其後の變化による各國の經濟的發達の現状に沿ひ得ざることをも、此植民地再分割の努力を強むる事情として數ふべきであらう。けれども問題は、マルクスにあつては各民族の對立を弱めるはずであつた資本主義經濟の進行が何故に帝國主義といふ深刻の對立にまで、進みては世界大戰にまで導かざるを得なかつたか。これが一の大なる問題である。

3) レエニン帝國主義論、邦譯岩波文庫版 II9-II20頁
4) 同書 127頁

私は一應立ちとゞまつて、事實の審判のまへに、對立せる見解を立たしめよう。レエニンの學説はすでに世界大戰の後に書かれてゐる。十九世紀後半からの帝國主義の現實を白日の下に見せつけられて書かれたものであるし、資本主義の最近の段階が帝國主義の姿をとつてゐるといふ主張に誤りのあるはずはない。マルクスの主張はなほ未だ此現實を十分に豫見するまでに至つてゐない。けれども、たゞそれだけから、レエニンの帝國主義論を全面的に肯定しなければならぬであらうか。

レエニンは獨占資本主義が政策として帝國主義をもつといふことを否定する。獨占乃至金融資本主義、即ち帝國主義であるといふ。けれども一體これは何を意味するか。レエニン自身も認めてゐるごとく、帝國主義はロオマ帝國からすでにある。或は更に以前に亘つて認められねばならぬ事實であらう。たゞそれが經濟發達の段階によつて異なる姿をとることはあるにしても、金融資本主義が即ち帝國主義であるといふ理路はどこにもないはずである。帝國主義が金融資本主義によつて規定せられ、一の特徴ある具體的な姿をもつことから金融資本主義は帝國主義であるといはねばならぬならば、金融資本主義は慈善であり殺人であり、宗教であり國家であり、その他現代に於けるすべてのものである。それはノンセンスである。

こゝに私はカウツキイの超帝國主義の見解に論及しなければならぬ。マルクスによれば、資本主義の發達は民族の境界を弱める。而してカウツキイの超帝國主義論はまさに此方向に動けるものである。カウツキイによると純經濟的見地からするならば、資本主義がなほ一の新たな段階、即ちカルテルの政策の對外政策への轉化、超帝國主義の段階を通過するであらうといふことは、あり得ないことではない。換言すれば、現在の帝國主義的政策

が一の新なる超帝國主義的政策——これは國家的金融資本相互の鬭争の代りに、國際的に結合せる金融資本による世界の共同的搾取をもたらすであらう——によつて驅逐さるるのは可能なることである。否、帝國主義の最初の組織的理論家ホブソンすらも『西洋諸國のもつと大きな同盟、即ち諸強國のヨオロッパ的聯合』の可能、西洋の世界的寄生主義、世界的階級組織を認めてゐる。而してレニン自らいふ。『純經濟的見地といふ言葉を純粹なる抽象と解するならば、超帝國主義理論に於て語られ得ることの總ては、發展は獨占の——かくして一個的世界的獨占の、一個の世界的トラストの——方向に動く、といふ命題に歸着する。この命題は疑ひもなく正しいが、しかし同様に無意味である。』而して彼によれば、『超帝國主義といふ死せる抽象論に對立させるに、近代的世界經濟の具體的な經濟的現實を以て』しなければならぬ。然らば具體的現實は此超帝國主義論を如何にして否定するか。

『いま假にこれらの帝國主義國が、右のアジア諸國に於ける彼等の領有、利益、及び勢力範圍を保護し、或は擴張するために、相互に同盟を結ぶとしよう。これ帝國主義相互同盟、或は超帝國主義同盟であらう。また假にすべての帝國主義列強が右のアジア諸國の平和的分割の爲に同盟を結ぶとすれば、それは一の國際的金融資本同盟であらう。』今問題はかゝる同盟は短命でないだらう、かゝる同盟はありとあらゆる形態の軋轢衝突及び争鬭をなくするだらう、といふことが考へらるるか。『この問題をはつきりと提出するだけで、これに全く否定的な答を與へることが出来る。』『それに参加せる諸國の力の關係の變動は不均等である。個々の企業、トラスト、産業部門及び各國が均等に發展するといふことは、資本主義の下ではあり得ないから。』『それゆゑに帝國主義相

互同盟、或は超帝國主義同盟は、不可避免的に戦争と戦争との間の息抜きでしかあり得ない。⁶⁾』

かくてレエニンの超帝國主義否定論は次の如き内容のものに外ならぬ。資本主義が世界的獨占の方向に動く。これは純經濟的に、又は抽象に見て正しい。けれども現實にはかゝる獨占は成立しがたく、やがて内部に衝突對立を生む。それは各國の勢力關係が變動するからである。立入つていへば、此變動の結果、獨占によつて各々確保したる利益の割合と力の割合とが一致しないからである。思ふに、現實がさうである、といふことに誤りはない。此意味に於て、カウツキイの超帝國主義論は現實の見誤りをしてゐる。けれども、資本主義そのものの發達の方角としてはレエニンもいへる如く正しいものをつかむでゐる。現實がさうでないといふのは、他の事情が作用してゐるからである。資本が結合して獨占を形づくるに拘はらず、而もその資本の各部分が國籍を失はず民族性を失はず、相争はうとする、これだけがレエニンの議論に前提とせられてゐる。資本は世界的獨占に向ひながら而も民族對立によつてそこに行き得ない。所謂具體的現實といふのは此資本主義の動きが民族對立といふ事情によつて束縛せられたる姿をさすに外ならぬ。資本主義とは何ぞや、それは所謂抽象的のものではなく、現實に於て之を妨げ、之を變容するすべての具體的のものを含むのであるか。さうであるならば、一の現實——日本のいまの經濟——は同時に資本主義經濟であり又社會主義經濟であり、又單純なる商品生産の經濟であり、又封建經濟ですらもある。而して具體的現實としては、この資本主義經濟は即ち一の封建經濟である。かゝる不合理乃至困難から免れようとするならば、資本主義經濟は資本主義經濟であり、その作用を妨げようとする他の事情は他の事情であると見る外はない。資本主義經濟といふものが一の理想型概念であることに、レエニンは思ひ至つ

6) 前掲、帝國主義論 169-171頁

てゐない。

四

資本主義の進行は、國內に於ては常に必ず獨占に導いて來た。それは競争による資本の集中にもよるが、主として資本相互間の妥協的結合に基く。國際間に於ては何故に此資本の結合が行はれそこに國際的獨占が成立しないのであるか、資本自體の利益だけから考へると、必ずやさうであるべきことが、何故に實現せられないのであるか。そこに異なる民族間の資本の結合を妨ぐるものがあるからである。それは民族の對立、これに伴ふ國家的反感である。クウノオのいはゆる民族感情と國家感情との區別を抹消しようとは思はないが、かゝる區別如何は此際第二次的な問題である。所謂金融資本主義としての帝國主義といふのは、かゝる民族の自己擴充の要求それに基く民族の對立を意味するに外ならぬ帝國主義を、それを制約し、具體的形態をとらしむる條件又は事情に過ぎざる金融資本主義と同一視するものである。否進みて次の如くにいふことが出來よう。資本主義はそれ自體國際的資本結合に導き、又むしろ民族の對立を緩和せしむる作用を有する。たゞ、其結合の原動力たるべき打算又は合理的態度とは正反對の傾向である非合理的のものが帝國主義をもたらし、これを今日の段階に於ては金融資本主義と結合せしむる。資本主義が發達して帝國主義となるのではない。帝國主義が金融資本主義を制約しこれに變容を加ふるのである。

帝國主義とは何であるか。それはレニン自身も認めてゐる如く、今の資本主義のみに存するものではない。それが何であるかは資本主義から切りはなして考へらるべきであらう。國家の存立するところに民族國家の

存立するところ、それはつねに自己擴充の要求をもつ、いはゞ團體的自我が力の欲望をもつ。その作用が高まつて一定の與へられたる自然的領土を超えて擴張しようとするとき、それを帝國主義といひ得よう。たとへばホブソンはいつてゐる。帝國主義の特徴をなすものはそれ（國家をさす）の自然的堤防から氾濫して、反抗的且つ非同化的なる國民の遠近の領土を併合せんとするところの諸の企圖による純粹なる國家主義の貶質である。またいふ。シレイ教授は帝國主義の本質を巧に表示してゐる。「一の國家が國家的獨立の限度を超えて前進するとき其力は不安定且つ不自然のものとなる。これが即ち大抵の帝國の實狀であり、また我國（英國をさす）自身の實情でもある。一の國民が他國の領土にまで擴張するとき、彼等は領土の征服には成功しても、それを破壊若くは完全に驅逐し得ないことがある。」たとへば與へられたる自然的領土の何であるかを明確に規定することは困難である。従つてこれを一定の動機を以て置きかへ得るであらう。かゝる説明乃至定義の仕方はシユムペエタによつてとられてゐる。

シユムペエタによれば、國家が無際限の自己擴充の傾向にあるとき、これを帝國主義といふ。これを攻撃性即自ともいひ得よう。多くの場合、戦争は一の目的又は原因をもつやうであるが、それは眞相といひがたい。一の國家がどれほど強烈に、眼前の一目的を追求しても、それが終れば完全に攻撃的態度をすてると思はるとき帝國主義があるとはいはぬ。帝國主義の支配してゐるところには常に、擴充が自己目的である。それは決して具體的な一目的の到達によつて充されず、いはば國家の自己擴充が際限なく求められる。勿論かくの如き動機又は要求だけを持ち出したる定義が十分のものであるとは思はれないが、何が帝國主義の本核であるかを示す點に

7) ホブソン帝國主義論、改造文庫版 10, 12頁

8) „Imperialismus ist die Disposition eines Staates zu gewaltsamer Expansion ohne angebbare Grenze.“ Schumpeter, Zur Soziologie des Imperialismen, 1919, S. 5.

於て注目すべものがある。帝國主義は單なる經濟的利益の追求にもとづくものではない、打算に基く利益の追求としての資本主義は帝國主義の作用の一表面に過ぎぬ。其中核は全く其背後にある。それは擴充のための擴充争鬭の爲の争鬭、勝利の爲の勝利、支配の爲の支配である。これは具體的な利益を以て説明せらるべきものはなく、別に説明を要する。シムペエタはこれが經濟的説明を否定しようとするのではない。けれども、それはこれを現代の生産關係の反映とするのではない。寧ろ過去に於ける生活條件によつて促されたる戦争の結果として、一定の心理的傾向と社會的構造とが成り立ち、それが生活條件の變化したる今日に於ても殘存してゐる。此殘存物としてのみ説明せらるべきであらう。⁹⁾ 故に『帝國主義は先祖がへり(Avarismus)である。』いはゞそれは現在ではなく、過去の生産關係によつて説明せらるべきものである。それは「社會構造のアタヴィズムであり、又個人心理的感情傾向のアタヴィズムである。¹⁰⁾」それはあくまで非合理的のものであり、合理的なる資本主義とは全く反對のものである。

資本主義そのものは寧ろ民族的なる對立を緩和する作用を有すること、一方ではマルクス自身の認めたるが如く、他方に於ては大戰以前社會民主主義系統に屬する人人(カウツキイをはじめとして獨逸のマルクス主義者、佛のジョオレスなどまで)の認めたるが如くである。シムペエタの立場もまたさうである。『人は帝國主義的現象を現在の經濟的な階級利益に還元することも出来よう。新マルクス主義はさうしてゐる。彼等は、簡単にいふと、帝國主義を資本主義の發達の一定階段に於ける資本家的上層の利害の反映と見る。¹¹⁾』これは問題への解決に最も遠い見方である。資本主義は民主化し、個性化し合理化する。¹²⁾ 否本來、帝國主義はアタヴィズムである

9) 此説明の仕方を私は『社會學原理』に於て詳述してゐる。

10) *ibid.*, S. 6, 48.

11) *ibid.*, S. 6.

12) *ibid.*, S. 52.

から、近代に入るにつれて弱まるべき性質のものである。従つて資本主義世界は帝國主義の溫床ではない。『資本主義が經濟の中に入りこみ、又經濟を通じて現代民族の心理の中に入りこめる所に於ては到る所、反帝國主義的傾向が示される。』而してそのことは資本主義の最も發達し、民主主義が政治的に支配してゐるところに於て最も顯著である。¹³⁾なほ進みてシウムペエタアのいふ所にきかう、資本主義の發達したところほど、戦争軍備に對する原理的反對が強い。

次に資本主義の發達したる國家ほど、強き平和主義的政黨が發達して居り、若干の例外を除いていふと、戦争がつねに國內對立を伴ふからである。また資本主義によつて成立したる工業労働者は最も反軍國主義的である。國際的爭議の平和的調停方法の發達も資本主義心理の發達によつて説明せらるべきことと思はれる。これらの事實から推斷するに『資本主義は、其本質上、反帝國主義的のものである。』

シウムペエタアのあげたる事實の如き、必ずしもそのまゝ承認しがたく、詳細の點については、なほ問題とすべきものもある。けれども、帝國主義と資本主義との關係に關する根本見解については私見と完全に符合する。

私は歐洲大戰が資本主義發達の結果と見るべきものに非ずといふ私見を幾たびかのべて、資本主義が寧ろ帝國主義と相斥くことを高調したが、戦争の根本に存する擴充の要求といふ根本の見解に至つては、既に『社會學原理』(大正八年)以來之を反覆説明してゐる。シウムペエタアの次の重要な文句の如き、私が未だ其所論を讀まずしてかつて述べたるものと、言言相一致するといふも誇張ではない。『事實上現存するところの帝國主義的傾向は資本主義から導き出さるべきものではない、明にそれとは異なれるところの、外部から其世界にもちこまれた

13) ibid., S. 53.

14) 『マルクス經濟學論評』、『民族の問題』、『貧者必勝』

るところの現代生活の非資本主義的因子によつて支持せられたる要素としてのみ理解せられる¹⁵⁾』

レエニンの帝國主義論はマルクス學說の延長乃至完成に非ずして其否定である。而も、其内容は主としてオーストリア的な新マルクス主義やホブソンの見解以上一步をも出づるものとはいひがたい。此意味に於て、それはたゞレエニンの革命的事業の背景によつてのみ生命をもつものである。而もその致命的なる理論的缺陷は別に存する。理論の内容が經濟的利益の皮相を見るところの俗流の見方、乃至常識の範圍を脱せず、戦争と帝國主義との根柢にひそむところの要求、まことの動力を看過してゐる。かくして、帝國主義の眞理はつかまれてゐない。戦争の社會學的意義に關する深き洞察なくして、徒に經濟の皮相から帝國主義を理解しようとしても、それは本來不可能のことである。要するに、レエニンの帝國主義論一篇、それは俚耳に入り易いが爲に、多くの讀者をひきつけるにしても、學說史的には何等の獨創を含まず、理論としては誤謬の一集團である。

(昭和十二年十一月二十九日夜)。

15) *ibid.*, S. 56.